病児保育協議会
NEWS
一般社団法人 全国病児保育協議会ホームページ https://www.byoujihoiku.net/

第108号
2021年(令和3年)11月20日
〔発行人〕 会長 大川洋二
(大川こども&内科クリニック)
〔発　行〕一般社団法人 全国病児保育協議会事務局
〒860-8833
熊本県熊本市南区平成1丁目11番10号 株式会社 愛光社内
FAX.096-359-7538

第31回全国病児保育研究大会 in 北九州 大会特集号

第31回全国病児保育研究大会 in 北九州で病児保育の魅力が伝わったでしょうか。多くの協議会会員の方々のオンライン参加に感謝します。

第 31 回全国病児保育研究大会 in 北九州 会頭　**吉田　雄司**
よしだ小児科医院 病児保育室りんご 院長

第31回全国病児保育研究大会 in 北九州（31回大会）を2021年10月９日(土)・10日(日)の２日間、福岡県北九州市内の北九州国際会議場内会議室をLIVEおよびWeb配信会場として開催しました。九州圏内での研究大会は福岡市、大分市、熊本市に引き続き、福岡県では２回目、北九州市では初めてです。2018年の協議会理事会で北九州市での31回大会開催が承認され、29回大会終了後に北九州市内の協議会会員施設に呼びかけ2019年11月に第１回実行委員会を発足しました。その後福岡県内や九州、山口地区の協議会会員施設にも参加していただき１年８カ月後に従来の大会運営同様の現地開催を目指して、大会会場や懇親会会場の確保、特別講演、教育講演講師候補、シンポジウム、ワークショップのテーマ選定等準備を重ねてまいりました。

東京オリンピック・パラリンピックのため開催地変更となった第30回記念横浜大会が2021年１月に延期、加えてCOVID-19感染拡大で急遽Web開催に変更になったため実行委員会で開催時期の延期を検討、2021年10月も感染の収束が見込めないことから現地開催の中止を余儀なくされ30回大会同様に全面Web開催に決定しました。現地開催、ハイブリッド、あるいは全面Web開催になるのか情報不足で協議会会員の皆様には大変ご迷惑をおかけしました。28回大会（高松市）、29回大会（盛岡市）と同様、政令市であっても地方都市での開催、現地開催や懇親会が中止になったことより参加登録数がどこまで期待できるのか、企業協賛が望めない中で大会運営は大丈夫だろうか、開催当日までとても不安でした。現地開催では当然できるはずであった全国の皆様で対面での議論や懇親会でゆっくり対談できませんでしたが、大会参加登録数は当初想定された数を大幅に超えて大会終了後には900人以上となりました。

大会テーマは「預けて良かった～伝えよう病児保育の魅力を～」としました。COVID-19禍で子どもたちや家族の生活が一変、全国の病児保育施設利用者が激減する中で、病児保育そのものの存在意義、役割についても再考すべき時期かも知れません。

31回大会では協議会会長大川洋二先生が講演の中で示された「パラダイムシフト」や「ゆとり保育」の概念は視聴された行政の方から病児保育の新たな役割としてこれから政策に生かしたいとの評価を得ました。特別講演、教育講演では、主に北九州市内、福岡県内、九州地区から講師をお願いしました。過去の研究大会で議論された事故予防、虐待対応や、けいれん、食物アレルギー対策、予防接種の最新情報は市内のエキスパートに新しい知見を加えて御講演いただきました。医療的ケアを必要とする子どもたちへの対応では一般の保育所や児童発達支援事業所や訪問看護ステーションとの連携も取り上げました。シンポジウムでは「病児保育での養護と遊びの工夫」をテーマに全国から４施設にシンポジストを出していただきました。それぞれに素晴らしい御講演でした。

特別講演１では北九州市の子育て環境について北橋健治北九州市長と清田啓子北九州市子ども家庭局長が講演されました。過去の一時期北九州市はとても危険な町として全国的に負のイメージが強かったにも係わらず某NPO法人による次世代育成環境ランキングでは20政令市中10年連続で1位です。特に出産環境と小児医療体制が高得点で順位を押し上げています。出産前後小児保健指導（ペリネイタルビジット）は政令市では初めて公的事業となり産科医、小児科医、行政との連携が進んでいることや1982年に発足した新生児救急医療体制、北九州市立八幡病院を中心とした小児救急医療体制、さらに北九州市の病児保育事業について一地方都市の取り組みを発表されました。特別講演２では北九州市立八幡病院院長伊藤重彦先生は長年にわたり取り組んでいる医療機関や介護施設での感染防止対策について病児保育にも大いに役立つ内容で概説されました。特別講演３としてChild Health Laboratory代表　森田麻里子先生は子どもの睡眠やそれに付随する多くの育児情報を御自身の育児経験や多くの文献的考察から「子育ての情報を上手に読み解く」鍵を保護者にも分かりやすく講演されました。その他、各委員会主催セミナー、遊びや読み聞かせ、わらべうた、服薬指導等をテーマとしたワークショップもタイムリーな内容で同時開催されました。オンラインでのワークショップ運営は園田正樹テクニカルディレクターのご尽力で御参加の皆様には大変好評でした。本来ワークショップは現地で対面での開催が常識でしたが、これからは技術的な解決でより多数の方がオンライン参加やオブザーバー参加ができるでしょう。オンデマンド配信期間には是非すべての講演や一般演題を御視聴いただき、大会テーマに掲げた病児保育の魅力を伝えることができたのか、忌憚のないご意見を今後の大会運営に生かせればと考えています。

最後に、慣れないWeb開催ではありましたが協議会会員諸氏の予想以上の参加登録に感謝するとともに、第32回千葉大会ではCOVID-19が過去の出来事となり、現地で皆様方と対面できることを期待します。現地開催であれば経験してほしかった北九州の観光地や新鮮な食材、お酒等々は近い将来是非北九州市を来訪され実現しましょう。その際はお役に立てるよう「北九州で待っとるっちゃ！」

会頭講演

病児保育室は多機関連携の輪に入ろう

会頭：吉田　雄司（よしだ小児科医院 病児保育室りんご 院長）
報告者／座長：谷村　　聡（医療法人たにむら小児科 院長）

子育てと保護者の就労支援目的に始まった病児保育ですが、以前から吉田会頭は、病児保育は預かったこどもたちのケアにとどまらずその家族を含めたトータルな育児支援として深化すべき、との提言をされています。この度の講演でも、ご自身の施設「病児保育室りんご」での実践の紹介とともに、我々の病児保育が目指すべき未来像を明示されました。

病児保育室送迎時に保護者の態度を注意深く観察することで、虐待あるいは貧困が背景にあるマルトリートメントを見抜き、さらに児童相談所や虐待対応基幹病院とも連携することにより、家族支援まで繋げることが可能であることを解説されました。また気管切開や胃瘻造設等の医療的ケアが必要な子どもたちの日中の一

時支援機能は、児童発達支援事業所･放課後等デイサービスが受け皿となっていることが多いのですが、「病児保育室りんご」の実践例のように、今後は全国の病児保育室が医療的ケアと保護者へのレスパイト機能を持つことの必要性を指摘されました。そのためには病児保育施設は単にその施設や連携医療機関だけでなく、行政や基幹病院、療育施設、園・学校、発達支援事業所・放課後等デイサービス、訪問看護ステーションなどの他機関連携の輪への参画が重要であることを学びました。

講演を拝聴した参加者の施設が積極的に多機関連携の輪に入り、今まで以上に「預けて良かった病児保育室」の評価を、利用者だけでなく社会全体から獲得できることを期待しています。

協議会会長講演

病児保育のパラダイムシフト
～コロナとともに病児保育もかわる～

演者：大川　洋二（全国病児保育協議会 会長）
報告者／座長：米倉　順孝（大名よねくら小児科クリニック ベビートットセンター 院長）

新型コロナウイルス感染症の流行の影響により、病児保育の利用者数は減少し、その行く末が案じられる中で、これから病児保育はどの様に変わっていく必要があるのか、大川会長にご講演頂きました。

まず初めに病児保育のパラダイムシフトについてのお話がありました。少子化は加速され、働き方や生活スタイルは多様化し、育児そのもののパラダイムシフトが起こっており、病児保育もその変化に合わせて変わっていく必要があるというお話でした。これまでは、主に身体的な病気の子どもを保育してきましたが、それ以

外にも発達の問題を抱えている児、保護者の病的な状態、環境の病的な状態などへの対応を含め、いわゆるBiopsychosocialからのアプローチを提案されました。その新しい概念を踏まえた取り組みの一例として、ゆとり保育の実践についてもご説明頂きました。様々な課題を抱えている児を、手厚く保育する有用性が示されました。

次に、令和３年度に改訂された交付金算定方法の問題点について解説頂きました。令和３年度の算定方法は、基本単価が引き上げられ実績部分の加算額が圧縮されましたが、その結果年間受け入れが一定数を超えると減額してしまう仕組みになっているという問題点を指摘されました。また、2021年の緊急アンケート中間報告からは、65%の施設が来年度の交付金の減額を危惧しており、今後の交付金の算定方法に対しては定員制や基礎額の増額を希望する施設が60%を超え、より安定的な運営のための算定方法への変更に向けて協議が必要であろうということを示唆されました。

新型コロナウイルス感染症の流行により大きく変化する子育て環境のなかで、子ども達の未来を守るために、病児保育は本当のセーフティーネットの姿に変わっていく必要があるというメッセージを頂きました。浮き彫りになった課題に対する、解決のヒントが得られ、とても勇気づけられるご講演だったと思います。大川会長ありがとうございました。

特別講演１

北九州市の子育て支援の取組み

演者：北橋　健治（北九州市長）
清田　啓子（北九州市子ども家庭局局長）
報告者／座長：吉田　雄司（よしだ小児科医院 病児保育室りんご 院長）

1963年に旧５市が合併して人口100万人となり兵庫県以西では初めて、全国では６番目の政令市となった北九州市は現在７つの行政区に分かれています。多くの政令市同様少子高齢化が進み2020年度には人口は95万人以下、年間出産数も7000人を割っていますが合計特殊出生率では政令市で１位、某NPO法人による次世代育成環境ランキング政令市部門で10年連続1位の評価を得ています。なぜ北九州市が住みよい町として高い評価を得ているのかを行政の立場からデータを示しながら概説されました。①救急医療体制の充実、②JRやバス、モノレール、飛行場等交通アクセスがよい、③物価が安い、④安全・安心な町等、都会の便利さと田舎の快適さを併せ持つ地方都市の住みよさが挙げられます。さらには北九州市の子育て支援の魅力として市内４箇所の病院を中心に24時間365日対応の新生児を含めた小児救急医療体制、充実した保育環境（待機児童０、保育士の配置数等）、放課後児童クラブの全児童可、子ども医療費を０歳～高校生まで助成、公的な大規模子育て支援施設の開設等「元気発進!子どもプラン(第３次計画)」を基本とした施策があります。この計画の中で母子保健の充実として政令市では初めての取り組みとなるペリネイタルビジット事業の公費化や産後うつ対策しての産後ケア事業、医療機関併設型病児保育室の充実（現在市内に13箇所）により病気中や回復期の子どもと家族のケアにより虐待予防にも繋がるセーフティーネットの構築を官民一体となって取り組んでいることを報告されました。2020年度は新型コロナウイルス感染症の影響で病児保育室に預かる子どもたちが激減しましたがコロナ禍以前と同様の公的支援は継続されています。最後に、子どもの成長と子育てをオール北九州で応援し、子どもの声に耳を傾けつつ「みんなの笑顔があふれるまち」の創造に取り組んいることを強調され、病児保育に携わる私たちに対して心強いメッセージを発信されました。

教育講演 1

子どもたちと一緒に道を作る

演者：松丸　実奈（NPO 法人にこり 理事長）
報告者／座長：田川　正人（田川小児科医院 院長）

私が担当した演題は「子どもたちと一緒に道を作る」でした。演者の松丸さんは看護学校を卒業後、北九州市立医療センターのNICUを皮切りに看護業務に携わった後、小児の訪問看護ステーション、こどもデイサービス、居宅介護事業•相談支援事業、産後ケアステーション開設に携わるなど多岐にわたって医療的ケア児や小児がん患児などの子どもとその家族を支えるための事業を精力的に進められています。今回の講演はこれまでの道筋を示し、プロモーション動画の紹介などを加えたとてもわかりやすい、またインパクトのあるものでした。

日本中で暮らしている医療的ケア児、小児がんの子どもたち、貧困を抱えている家庭、虐待が潜んでいる家族などは我々医療従事者だけではなく、各地域の色々な資源を注ぎ込み、地域のなかで見守り、共に育てていくことが大切であることを学びました。私たちは子どもたちの心の声を聴くために、子どもたちに触れて、見つめてあげる必要があること、彼らの生きる喜びや命の大切さを分かち合い、伝えていくことが重要であることも再確認できました。

地域を巻き込みながら、多くの仲間と繋がり、子どもたちの「当たり前の願い」が叶い、満たされるように、私たち医療従事者は多職種の方々と連携することが大切であることを認識しました。NPO法人にこりは北九州において多職種連携の中心的役割を担っておられます。我々病児保育施設を運営するものからすると、今後私たちが深く関わっていく必要がある、子育て支援や医療的ケア児の一時預かりなどの事業などに関して参考となる部分が多々あると考えられるので、興味のある方は同法人のWebサイト（https://nicori.org)を閲覧するなどして学びを深められることをお勧めします。

今回の講演を聞いて、これまで道を作ってきた主役は大人ではなく子どもたちであることに気づかされました。これから続く道も子どもたちが切り開いていくことでしょうが、地域でそれをサポートし共に成長していけるように皆で頑張ることができれば良いなと思いました。

教育講演 2

WITH コロナ時代の病児保育における感染症対策

演者：是松　聖悟（埼玉医科大学総合医療センター 小児科 教授）
報告者／座長：古賀　一吉（医療法人あだち古賀クリニック・病児保育室キッズルームあだち 院長）

私たちは今回のコロナ禍を経験して、未知なる感染症との戦いがいかに辛く、長いかを実感しています。また病児保育の現場では、防護具の着用やソーシャルディスタンシングなどが、保育そのものの大きな弊害となっています。そこで、教育講演２では「WITHコロナ時代の病児保育における感染症対策」と題して、私たちが日々苦慮している病児保育室の感染症対策について、埼玉医科大学総合医療センター小児科教授 是松聖悟先生にクイズ形式で大変分かりやすく講演して頂きました。是松先生は感染症分野のみならず、小児科の全分野においてバランスよく多岐にわたってご活躍されている著名な先生です。外来診療も含めて感染リスクをゼロにすることは不可能ですが、最低限の努力で最大限の効果を発揮する手段として、主にマスク、フェイスシールド、手袋などの防護具、ソーシャルディスタンシング、換気、消毒などについて実践的な詳しい解説が

ありました。Ｑ１：手指を感染から守るには？、Ｑ２：新型コロナウイルス感染症の濃厚接触者にならないためには？、Ｑ３：フェイスシールドはどんな場面で有効？、Ｑ４：マウスシールドはマスクの代用になる？、Ｑ５：手袋は誰を守るもの？、Ｑ６：トイレでの感染予防については？、Ｑ７：風邪って発症後いつまで感染力がある？、Ｑ８：マスク、手指消毒に追加して有効な手段は？、Ｑ９：PCR検査の精度は？、Q10：抗原検査の陽性率は？、Q11：空気感染する感染症は？など、ここでは紙面の関係上、「Q&A」の一部のみ抜粋して提示しましたが、実際にはこのような予防対策以外にも感染症全般に必要な知識を分かりやすく概説して頂きました。病児保育室における明日からの感染対策において、とても参考になったのではないかと思います。私たち小児科医からしても目から鱗の充実した内容満載でしたので、後日閲覧可能なオンデマンドの配信動画にて是非ともご覧になって下さい。

教育講演３

心をカタチに… お客様から教えていただいた大切なこと

演者：**渕　けい子**（株式会社スターフライヤー CS 推進部長兼おもてなしセンター長）
報告者／座長：**吉田ゆかり**（よしだ小児科医院 病児保育室りんご 理事長）

この講演のポイントは私たちが日常よく耳にする言葉「ホスピタリティ」でした。相手の立場に立ち、思いやり溢れた行動や心遣いの原点となるおもいやりの精神です。飛行機の中で過ごす時間は、客室乗務員として五感を働かせお客様と共につくりだすものです。求められてはいないけど、こうしたらもっとお客様が喜ぶのではないか、快適な時間を過ごすことができるのではないかと考えて行うもの、すなわち「ホスピタリティ」、心からのおもてなしです。そのためには、6つの配り（目配り、気配り、心配り、手・足配り、言葉配り）を発揮する、そして入念な準備に心を尽くすことが必要だと話されました。日々のお客様との対話、手紙やメールの中から示唆を得、答えは一つではないと自覚し、想いをかたちにしていく、それによって喜びや感謝となり、お互いがハッピーになると話されました。業界が異なる医療の世界においても対人職として必ず共通する想い、「ホスピタリティ」があるはずだと締められました。

教育講演４

病児保育における経口補水療法

講師：**南　武嗣 先生**（みなみクリニック 病児保育室ダーグ・ヘム 院長）
報告者／座長：**河村　一郎**（かわむら小児科 病児保育室モーモーハウス 院長）

嘔吐・下痢（脱水）があると水分のみならず、塩分、糖分も失われる。経口補水療法（ORT:oral rehydration therapy）とは電解質、糖質、水分で構成された経口補水液（ORS:oral rehydration solution）を用い、急性胃腸炎などで失われた水分、電解質を補充するものである。

自宅、保育園、幼稚園、学校などで嘔吐や下痢があったら、少量ずつ５分毎に10ml程度のORSをまず与え始め、嘔吐があっても少量ずつ続けることを推奨する。ORTの基本は腸管のNa-ブドウ糖共輸送担体１（SGLT- １）によるNaと水の吸収であり、Naとブドウ糖のモル比、１：１～２が重要である。

ORTをなげあたえるだけでは難しく、医療機関や病児保育室で保護者と患児と共に30～40分飲んでもらうとよい。飲んでもらうコツとしてコップで目盛りを書いて具体的に量を示す、スポイドを使うなどもよい。実際に医療者が飲ませ方を見せるとよい。

2011年からわが国でもロタウイルスワクチンが導入され、最も重症なロタウイルス胃腸炎は減少した。2020年10月から定期接種化されたため、１歳未満の重症胃腸炎はほとんど見られなくなり、ORTで十分対応可能となった。

重症の脱水、ショック、低血圧、けいれん、腸閉塞、腸重積、虫垂炎、敗血症などを疑う時はORTを中止し、医療機関に受診し、点滴などの経静脈輸液と病因の検査が必要である。

病児保育室の現場では、30分ORTを行っても嘔吐が止まらない場合、吐物の中に黄色や緑色の胆汁が混じっている場合は、マヒ性腸閉塞も含め経静脈輸液と検査が必要な疾患が疑われるので ORTは中止し、ただちに医療機関への受診を勧める。

講演後、10ぐらいの質問があり、ORSが飲めない子への対応、ORSを冷やしたり、温めたりする方法もあること、イオン飲料を薄めて飲ませるのはよくないこと、ORSの使用期間などをお答えいただいた。

明日からの病児保育室での対応に実践的で非常に役立つ講演であった。

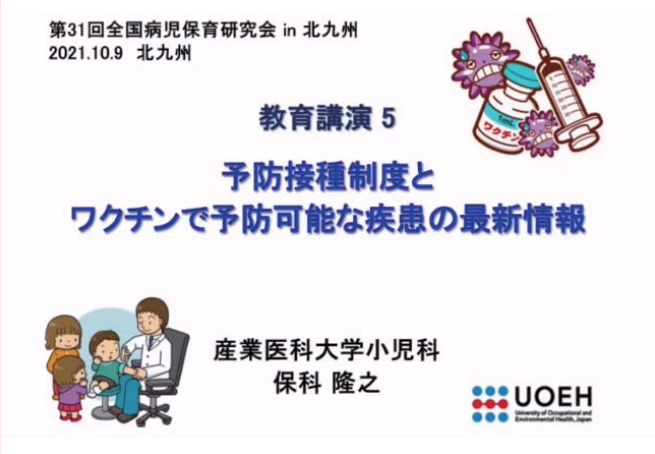
教育講演５

予防接種制度とワクチンで予防可能な疾患の最新情報

演者：保科　隆之（産業医科大学小児科 准教授）
報告者／座長：戎　　寛（えびす子どもクリニック 病児保育室わんぱくキッズ 院長）

1990年代から2000年代にかけて、日本は、他の先進国と比較してワクチン接種費用のすべてを公費で行うワクチンの種類が少なく、「ワクチン後進国」と揶揄されていた。しかし、2010年以降、任意接種として実施されていたワクチンが次々と定期接種化され、他国との「ワクチンギャップ」は解消されつつある。

定期接種化にともなってワクチン接種率が上昇したことにより、ワクチンによって予防可能な疾患（Vaccine preventable diseases: VPD）の患者数



にも変化が生じてきた。その代表の一つが細菌性髄膜炎であり、乳幼児の細菌性髄膜炎の主要な起炎菌であったインフルエンザ桿菌b型と肺炎球菌に対するワクチンが定期接種化され、細菌性髄膜炎に罹患する乳幼児は劇的に減少した。また、保育園や幼稚園で頻繁に流行していた水痘も、ワクチンの定期接種化により患者数は減少している。このように、ワクチンは感染症の発生を大きく変化させることができることは明らかである。新型コロナウイルス感染症の流行が続いている中、このワクチンの有効性も明らかになっている。

本講演では、毎年のように改変される予防接種制度およびVPDの現況が示された。特に、保育園児や幼稚園児が影響を受けやすい感染症とそれを予防するワクチンについて詳しく述べられた。

病児保育にとって予防接種は重要なテーマです。まだ受けていない予防接種について自信を持って家族に説明し、積極的に勧めるために役立つ講演でした。

子どもたちの健康を守り、病児保育室の質の向上のために、保育士・看護師・医師が協力してワクチン接種率向上のために力を合わせていきましょう。

教育講演６

神経発達症の子どもたちに学ぶ病児保育
～多様な親子へ安心、安全を届ける～

講師：笠原亜希子（糸島こどもとおとなのクリニック 児童精神科外来担当小児科医師）
報告者／座長：古賀　豊（ゆたかクリニック 病児保育室 院長）

演者は現在、複数の病院の児童精神科外来で活躍されている小児科医です。

本講演では「病児保育室に来る子供の不安な心理状態に病児保育士はどう関われば良いか」というテーマを３部構成で解説されました。

第１部「定形児も自閉症児も連続帯」では、「誰しも何らかの不器用さを抱えていること」、「体調不良で保護者と離れ、慣れない場所で過ごす子供の心理状態（不安や神経過敏）は、程度の差こそあれ定形児・自閉症児とも同じであること」、「自閉症の特性の一つである新奇場面（初めての場所、初めての活動、初めての人）への適応困難への対処法は定形児にも有効であること」を話されました。

第２部「保育現場で使える工夫」では、児に病児保育室が安心・安全であることを感じさせるための３つの工夫（各種心理介入療法に基づいた方法）を話されました。一つ目は「信頼関係構築のため、児に肯定的に関わるスキル（自発された適切な言葉を繰り返す、自発された適切な行動を言葉にする、良い言動を具体的に褒める、選択的注目と戦略的無視）」を、二つ目は「環境調整のスキル（空間の整理、刺激を減らす、時間の見える化、すべきことの見える化）」を、三つ目は「児の行動の意味を考え、その行動が社会的に容認されるか否かを判断し、対応を変えるスキル（分化強化、消去）」を、具体的事例を交えてお話し頂きました。

第３部「迷える親子を救おう」では、病児保育士の職務に期待することを２つ提言されました。一つ目は「保育士は第２部の３つの工夫を保育現場で実践し、有効性を実感して欲しいこと」、「その実感を基に児の保育中の様子を保護者に伝え、育児法のヒントを保護者に与える機会とすること」でした。二つ目は「病児保育という児にとってストレスフルな環境は児の特性が現れやすく、日頃見落とされている問題点に気づける場であること」、「病児保育士はその問題点の発見者になって欲しいこと」でした。

シンポジウム

テーマ：病児保育の養護と遊びを工夫する

座長：永野　和子（みるく病児保育センター）
シンポジスト：川﨑　静香（練馬区医師会病児保育センターぱるむ光が丘）
川上　恵子（病児看護センターベアーズデイサービス 施設長）
河合　雅子（ニコこどもクリニック 病児保育室ニコのおうち 保育士・病児保育専門士）
中川　和美（横井小児科内科医院 病児保育室「こりすの里」看護師）

病児保育が子育て支援としてスタートして30年が過ぎ、様々な形態で病児保育は子育て支援策として定着してきた。そこで、病児保育協議会が掲げる子どもを中心とした病児保育とはどのように現場で実践されているのか、保育の質とはどのようにとらえられているのかということを考えるために、「病児保育の養護と遊びを工夫する」と題して４人のシンポジストにご講演いただいた。

川﨑先生のご講演では、「子どもの遊ぶ力を引き出す」と題して、病児保育に入室してくる子どもたちに病児保育のスタッフが最高の環境を提供することが大切であり、そのことで子どもたちにとって日

常通いなれている場所ではない病児保育室であっても、子どもたちの大切な生活の場となり得ること、また、子どもたちが自発的に遊ぶということで安心感を得ることができているというお話を、エピソードを交えながらお話しいただいた。

川上先生のお話しでは「遊びの提供について」と題して、子どもたちが入室してきても、またどのスタッフが担当することになっても子どもたちに安心して一日を過ごしてもらえるようにと、おもちゃファイルを作成したり保育日誌を通して、スタッフ間の情報共有としているというお話をいただいた。

河合先生は、「「触れる」子育ての重要性と今後の子育て支援の在り方について」と題して、自施設でとったスマホ使用などのアンケートをもとにご報告をいただき、病児保育室で子どもを保育するだけではなく、もう一歩踏み込んで保護者へのアプローチした事例の紹介や、実際に入室している子どもたちとの「触れる」という遊びの紹介を写真を使ってご紹介いただいた。

最後に、中川先生には「グッドイナフ人物画知能検査を利用した発達評価の試みと構造化を取り入れた発達支援」と題して、グッドイナフとはどのようなものかをお話しいただき、また実際に一人の子どもを追跡してその発達段階をその子の書いた画を示してお話しいただいた。そして、その画から子どもの成長が少しずつではあるが読み取れていく過程をご紹介いただいた。

どの講義も写真やエピソードを交えたお話しで、様々なアプローチの方法により、あたたかな子どもたちへのまなざしが語られたことで、質の高い保育実践を学ぶことのできるシンポジウムであった。

特別講演２

病児保育室の衛生管理～飛沫・接触感染の防止対策または北九州市における新型コロナウイルス感染症の総括

講師：伊藤　重彦（市立八幡病院 院長）
報告者／座長：津田恵次郎（つだこどもクリニック 院長）

特別講演２は伊藤重彦先生（市立八幡病院院長）から「人の集まる場所が感染対策の必要な場所～コロナ禍における効果的な地域感染対策について」と題してお話を伺いました。KRICT（北九州地域感染制御チーム）の活動を紹介し、ガイドラインやエビデンス導入ができない施設では無理なく長続きする、施設の事情を考慮しながらのオーダーメイド対策が重要ということでした。この活動は行政と連携して実働の部分を地域と一緒に行うものです。研修会への施設長・事務長の参加は責任者としてだけでなく予算確保の意味もあります。衛生教育が難しい子どもの特徴を考慮した感染対策としてマスク、ソーシャルディスタンス、手指衛生の基本的な説明がありました。飛沫感染対策としてマスクの正しい使い方やソーシャルディスタンスの予防距離は1.5m～２mは最低限であり、身長や声の大きさなどを考慮する。身長の高い大人からは低い幼児に飛沫距離が長くなる。換気については、室内の空気の流れを十分考慮して、扇風機など影響を与える機器の位置を検討する。消毒では職員が触る場所を最優先することや玄関のスリッパ履き替えと手指消毒の順序、目的を記載すること、事務室入り口と保育室両方への消毒薬を複数配置するなど実用的なものでした。また二人目の感染者をださないために咳、鼻水、掻痒などスタッフの症状を集団として内容や変化を把握し共有する。施設責任者へ届く体制作りをすることにより共通点を考え、飛沫・接触感染を予防する。職員の体調管理をすることで、消毒や環境除菌につなげるなどです。講演後には参加者から消毒に用いる次亜塩素酸ナトリウム濃度（0.05%）についての質問がありました。最後に動画配信中の「ストップコロナプロジェクト2021FUKUOKA」の現状を話されました。新型コロナ感染症対策のピットフォールを考えるうえで大変有意義なご講演でした。

実践教育セミナー

テーマ：病児保育室での緊急時対応

講師：神薗　淳司（北九州市立八幡病院 統括部長・小児総合医療センター長）
渡辺　恭子（国立病院機構小倉医療センター小児科 小児科部長）
古賀　一吉（医療法人あだち古賀クリニック・病児保育室キッズルームあだち 院長）
報告者／座長：竹中　　聡（医療法人たけなかこどもクリニック 病児保育室ちゅーりっぷ 院長）

はじめまして。福岡県福津市で病児保育を運営しています竹中聡です。今回、第31回全国病児保育研究大会の実践教育セミナーの座長を務めさせていただきました。２時間枠を一人で座長をするのは初体験でしたが皆様の貴重なお時間を無駄にしないようにこころがけました。

今回のテーマは「病児保育室での緊急時対応」と題して３人の講師の方をお招きしました。一題目は北九州市立八幡病院の神薗淳司先生に「乳幼児の発達段階に応じた傷害予防と緊急時の備え」をご講演していただきました。貴重な症例写真を提示されながらのご講演は非常に勉強になりました。保育士だけでなく小児科医も明日にでも使える知識も豊富でした。２題目は小倉医療センターの渡辺恭子先生による「病児保育室での熱性けいれんの対応」です。先生の語りかけるような口調は熱性けいれんに対して苦手意識を持っていた者にもすんなり頭に入ったのではないでしょうか。疫学的根拠を交えてのけいれん時対応はためになりました。最後は実行委員長であるあだち古賀クリニックの古賀一吉先生による「病児保育室でのアレルギー対応」です。喘息から食物アレルギーやアナフィラキシーについてご講演をいただきました。特にカメラの前で行った未使用のエピペン®の実演は永久保存物ですので必見です。３講演終了後、非常に沢山の質問を頂き30分あったにも拘らず全てにお答えできなかったのが心残りでした。ご質問を拝見すると保育士はこういうところに不安を持たれているのかと認識させるものが多く勉強になりました。座長として用語の読み間違いや質問の整理が間に合わないなどご迷惑をおかけしました。しかし２時間という時があっという間に過ぎるほど、素晴らしいご講演と沢山の質問に囲まれて座長冥利につきます。最後になりますが座長を任せていただいた会頭の吉田雄司先生、ご講演頂いた諸先生方、たくさんのご視聴者様に感謝をいたします。

特別講演３

子育ての情報を上手に読み解こう

講師：森田麻里子（Child Health Laboratory 代表）
報告者／座長：松田　幸久（まつだこどもクリニック 病児保育室「森のくまさん家」院長）

演者の森田麻里子先生は、２児のおかあさんで現在子育ての真っ最中で育て関連の情報での疑問に思ったことを、科学的データを用いて調べてこられました。

子育て情報は、昔言われていたことや、本やネットの情報も多すぎて、検証する必要があります。情報の信頼性について、エビデンスを指標にすることがありますが、ここにも落とし穴があります。「エビデンスがある」が、正解でもなく、また、「エビデンスがない」ということが、正しくないことを証明しているものでもありません。エビデンスのある・なしと白黒つけるのではなく、グラデーションのか

かった不完全なものです。

情報の活用には、３つのステップ、３つのポイントをあげて、分析することが重要だと述べられています。まず（1）色々な情報を知る（2）情報の違いの背景を知る（3）具体的な仕組みやデータを知るです。離乳食について考えると、以下の３つのステップで考えていきます。(1)いろんな食材を知る。（2）離乳食の目的は、食機能、食育、味覚を育むなどがあり。（3）これらの情報で、具体的に離乳を進めていきます。離乳食の情報活用の３つのポイントは、（1）気質の差、（2）価値観や重視する点の違い、（3）理想と現実の違いを考えて、活用します。まず、赤ちゃんが好んで好んで食べられるか、栄養摂取が十分で食べやすいか、そして準備しやすさや食材の入手しやすさを考えていきます。

子育ての方法は、それぞれの家庭で、社会的環境で置かれている立場が違うので、意見は違ってよく、情報はきちんと読み解いた上で、「自分にとっての答え」を身につけ、自分らしい子育てをしてほしいと述べられています。科学的に正しい情報にがんじがらめな子育てではなく、正しい情報を知って、自分の状況にあった情報を選び、自分にあった子育てをして、楽しい子育てをしてほしいです。

基礎研修「ステップアップ研修」主催セミナー

症　例　検　討

報告者／座長：福富　悌（福富医院 すずらん病児保育室）

今回のステップアップ研修は、昨年に引き続き症例を提示して行われました。症例を通して保育士、看護師、医師のそれぞれの立場から意見が述べられました。症例は良く経験される症例でした。病児保育は病気の知識だけではなく、子どもにとって不安やストレスを与えず、発達を考慮した対応が必要です。そのため、知識を生かした対応や、保育看護の展開の仕方を学ぶためには良い研修だったと思います。今回の症例は３例で最初は５歳１ヵ月の児で右足部挫滅創・右頸骨不全骨折のための利用でした。この症例については、両親の関わりや養育環境、介助方法から、本人の気持ちを考えた関わりについて議論されました。次の症例は１歳１ヵ月の児で、咽頭炎・消化不良症のための利用でした。保護者は共

働きで核家族のため支援者が周りにいないため、家庭での食事や予想される症状への対応を含めた展開が行われました。最後の症例は２歳３ヵ月の喘息性気管支炎の症例でした。２週間ほど前に熱性けいれんがあり救急車で搬送されていました。前日までは39℃の発熱がありましたが、来園時には解熱していました。この症例ついてはけいれんに対する考え方、けいれんを経験し救急車で搬送されたことで、発熱に対する保護者の不安の大きさ、咳や痰から考えられる症状の変化などについて意見が交わされました。

これらの症例を通して、よく経験される症状であっても、その捉え方、対応、症状の移り変わりの予測、病児保育室での経過について保護者への伝え方、さらには家庭での対応や注意点について考え方の方向性が理解できたと思いました。

病気や怪我のある子どもが安心して病児保育を利用できるためには、子どもの病気の症状についての対応と、症状を基にした関わりだけに目を向けるのではなく、保育士看護師によるチームワークが大切で、子どもの不安な気持ち、家族の病気に対する不安など、子どもを育むための幅広い看方が大切であることが学べました。

倫理委員会 主催セミナー

病児保育の“事例研究”に必要な倫理的配慮とは

講師：金城やす子（名古屋学芸大学看護学部 教授）
報告者／座長：木野　稔（大阪旭こども病院 アリス病児保育室 理事長）

第29回、第30回大会に続き、今回も倫理委員会セミナーを開催しました。第31回はオンデマンド配信ということが決定していましたので、講師として引き続き名古屋学芸大学看護学部教授の金城やす子先生にお願いしました。倫理的配慮とは何か、を保育の立場に立って、病児保育で必要な考え方知識をまとめて説明していただきました。研究における倫理には、研究対象者の人権擁護という面と、研究における不正行為という２つの側面があります。重要なことは、研究対象者となる子どもと保護者の人権擁護であると強調されました。倫理的配慮の実際についても具体的にお示しいただきました。不正行為など自分には関係ないと思っているかもしれませんが、研究は倫理を抜きには語ることができないと実感いたしました。病児保育に関わる、施設長および全スタッフに聞いていただきたい内容と思います。なお、協議会の機関紙である、病児保育研究の第11号にも詳細に総説論文をいただいていますので、是非ご熟読ください。協議会として病児保育のエビデンスを出そうという大川会長の方針に、倫理的な配慮をもった質の高い研究が求められております。当協議会では、一般社団法人化にともない倫理委員会が設置されています。講演の中でも示されましたが、第三者による倫理審査が必要だが、施設に倫理委員会が設置されていない場合や、多施設で共同研究を行う際には、協議会の倫理審査委員会で行うことになります。倫理委員会は皆経験豊かなメンバーで構成されています。研究を始める前に、倫理審査申請とはどのようなことかなど、事前の相談にも対応させていただきますので、どうぞお問い合わせください。次の第32回千葉大会では倫理セミナーをワークショップ形式で開催する計画です。施設長はじめスタッフのみなさまのご参加をお待ちいたしております。

保育園型委員会 主催セミナー

温かなまなざし
～保育園型の良さを事例から学ぼう～

演者：桜井ますみ（帝京平成大学 児童学科 准教授）
原　文子（おやこの森）
本橋　恵（恋ヶ窪保育園 たんぽぽ病後児保育室）
山本　里江（ナオミ保育園 病後児保育室バンビ）
報告者／座長：西倉　美奈（洋光台中央福澤保育センター 病後児保育室ひまわり 施設長）

病児保育マニュアルの保育所型病後児保育における入室が望ましくない例を参考に、保育園型委員会は『病後児保育室の受入れめやす』を作成した。このめやすに基づき、2018年12月から１年かけて全国39施設で行った実態調査の結果について、委員会研究班を代表して、おやこの森、原文子看護師にお話頂いた。めやすを参考に受入れた結果として集まった12,182名のデータから、体調が悪化し、迎えの要請をしたケースは全体の4%であり、受入れめやすは指標として十分に使用できるものであると考えられた。

また実際にめやすを活用した実践例を恋ヶ窪保育園たんぽぽ病後児保育室、本橋恵保育士とナオミ保育園病後児保育室バンビ、山本里江看護師にお話頂

いた。遊びや生活の姿、体調の変化などをおたよりノートを通して丁寧に情報共有し、信頼やコミュニケーションを築く糸口とする実践や、受入れの困難なケースに対して保護者の思いに寄り添いながら、子どもや保護者にとってより良い提案を考える実践は、多くの施設の参考になったのではないだろうか。まとめは『保育園で病気の子どもを預かること』と題して、帝京平成大学、桜井ますみ准教授にお話頂いた。保育所型病後児保育室は保育所の環境に近いことや保護者支援に慣れた職員が対応している点などの、子どもや保護者に負担が掛かりにくい環境が整っている良さや地域の医療機関との連携の必要性などの課題もお話し頂いた。さらにVTRで紹介された園長の想いに応えて21年間、わかくさ保育園病児保育室に往診をされている馬瀬医師の語った安心安全な病児保育室の運営やスタッフへの感謝も印象に残るものだった。

最後に砂原保育園病後児保育室とまと、明星こども園病後児保育室プーさんルームの施設動画を２本紹介した。どちらも保育園の理念が病後児保育室にも反映されている様子が伝わってきた。

めやすや実践報告、施設紹介など、具体的で参考にできる内容と保育看護者のモチベーションに繋がる内容とがあり、充実したセミナーであった。

感染症対策委員会 主催セミナー

With コロナ時代の病児保育

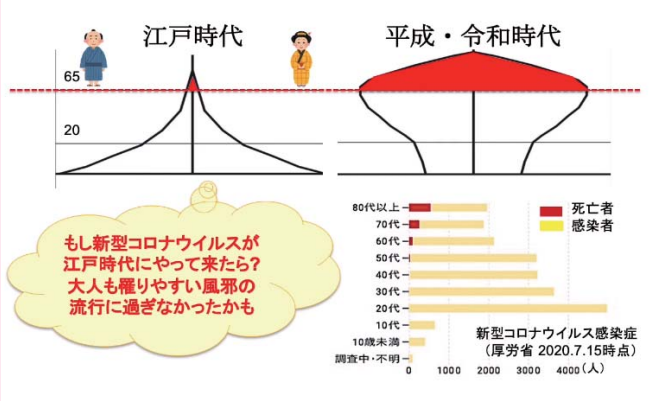
講師：森内　浩幸（長崎大学大学院医歯薬学総合研究所・小児科学教室 教授）
報告者／座長：佐藤　　勇（よいこの小児科さとう 病児保育室よいこのもり 施設長）

ご講演の冒頭に、米国での研究生活の経験から、こどもが病気の時に、夫婦がイーブンの関係で職場を休み看病することが当たり前の米国社会と、日本社会との違いを述べられ、日本での病児保育の必要性を訴えて下さいました。以前から関心をお寄せいただいていたことに感謝いたします。

森内先生は、デルタ株の出現で、こどもの感染者が増えている状況を分析し、それでも10歳未満は新型コロナ流行の主体では無いことを強調されています。新型コロナ感染症が、決して特殊な病態で無いことを、チンパンジー社会で起こった、それまで経験が無かったヒトライノウイルス感染では重症例が多発したり、今や普通のインフルエンザとなったスペイン風邪も当時は重症化した経験などから、集団に全く免疫が無い状態での感染症は、大人の重症例が目立つことを示されました。旧来の４種類のコロナ感染症では、こどもは４－６歳までにほとんどが罹患しており、ただの風邪で重症例は無く、大人では時に重症化することから、若年者の免疫応答に比べ、成人では免疫老化が進むことから、病気の重症度は、ウイルスの種類では無く、免疫応答によるものであることを示されました。

米国のデータでは、保育士の罹患率は、他の職種と比べても差が無く、職場での感染の広がりは否定的であることを示されました。これまでのデータでは、保育園や学校など、集団での感染防止に有効な手立ては、1）教師のマスク　2）連日の体調チェック　3）課外活動の禁止、の３項目があげられ、逆効果となるのは、換気を妨げるデスクシールドであることを示されました。また、こどものマスクは、運動時などにはリスクとなるため注意が必要であること、逆に大人のマスクシールドやフェイスシールドは、感染拡大には意味が無いことを示されました。

こどもの立場に立つと、インフルエンザやRSウイルスに比べ、新型コロナはただの風邪であり、感染防止を強化するほど、こどもの心に及ぼす影響は大きくなる。大人が通勤や会食などをおこないながら「なんちゃって緊急事態宣言」をする一方、こどもには休園休校を強いるのは、戒めなくてはならないと強調され講演を締めくくられました。



安全対策委員会 主催セミナー

改訂版「病児保育室の事故防止ガイドライン」を活用しよう

演者：米倉　順孝（安全対策委員会 委員長）
吉岡　敦志（ちどり保育園 副園長）
伊藤　康弘（さくら認定こども園 園長）
谷村　　聡（たにむら小児科 院長）
報告者／座長：米倉　順孝（大名よねくら小児科クリニック ベビートットセンター 院長）

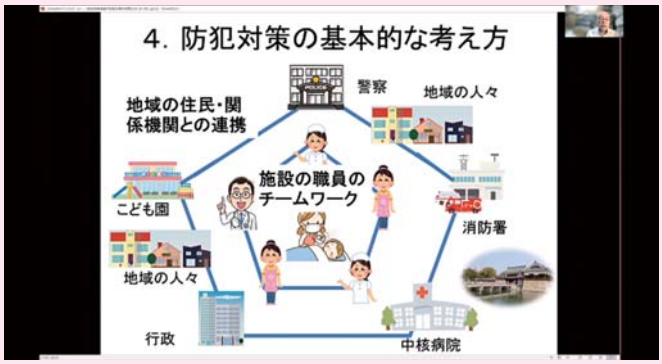
「病児保育室の事故防止ガイドライン」は、平成26年に初版が発行されました。その後も組織におけるリスク対応への関心は年々高まっています。また、毎年のように発生している自然災害への備えについても、多くの対応を迫られています。そして、組織を守るための方策について、多くの考え方が提案されるようになりました。

当委員会では、そのような背景のもとガイドラインを改訂し、今年の８月に皆様の施設へお送りしました。そこで今年の委員会セミナーでは、『改訂版「病児保育室の事故防止ガイドライン」を活用しよう』というテーマで、以下の内容で改訂のポイントについて解説をしました。

１，ガイドライン改訂のポイント　米倉順孝
２，新章「病児保育室のクライシスマネジメント」の理解のために
　１）BCP ってなに？
　　吉岡敦志委員（ちどり保育園　副園長）
　２）病児保育施設の防犯対策の実際
　　伊藤康弘委員（さくら認定こども園 園長）
　３）新興・再興感染症の危機管理を考えよう
　　谷村聡委員（たにむら小児科 院長）

まず初めに、私からガイドライン改訂のポイントについて、話をさせて頂きました。引き続き、３名の委員から今回の改訂の目玉であるクライシスマネジメントについてご講演頂きました。吉岡委員には、事業継続計画（BCP）の基本について、作りこまれたスライド動画でご発表頂きました。まだまだ聞きなれない言葉だと思いますが、分かりやすく解説して頂いていますので、参考になったと思います。伊藤委員には防犯対策の実際について、実例を交えて分かりやすくまとめて頂きました。各施設における取り組みのヒントになったと思います。谷村委員には、新興・再興感染症の危機管理について、楽しい写真もおりまぜてご発表頂きました。まさに今、コロナ禍で病児保育室の運営管理に多くの悩みや課題に直面しておられることと思いますので、参考になったと思います。

皆様のご施設におけるクライシスマネジメントのお役に立つことができれば幸いです。



施設情報の更新はお済みでしょうか？

当協議会では、ホームページに掲載しております施設一覧情報を会員各々に更新していただけるシステムを導入し、**令和３年６月１日より稼動**しております。これにより施設の最新情報を紙媒体での手続きを経ることなくホームページに反映させることができるようになっています。

会員の皆さまは必ず一度、**認証コード**でログインしていただき、会員情報の更新をお願いいたします。**システムのアドレス（URL）や使い方・注意点**などは病児保育協議会ホームページの**会員専用ページに掲載**いたしますので、ご確認ください。

第32回 全国病児保育研究大会 in ちば

未来をつくる子育て支援

―子どもに寄り添う新しい病児保育を考えよう―

2022年
7月17日(日)▶18日(祝)

幕張メッセ 国際会議場

- 会　　頭　佐藤 里美／さとう小児科医院・病児保育室バンビーノ
- 実行委員長　太田 まり子／おおた小児科・病児保育室ミルキー
- 主　　催　一般社団法人　全国病児保育協議会

大会事務局　さとう小児科医院　病児保育室バンビーノ
〒266-0031 千葉県千葉市緑区おゆみ野 3-22-6 かまとりクリニックビル 4F
FAX 043-226-9523
E-mail：info@satoh-syounika.com

運営事務局　株式会社ブランドゥ・ジャパン
〒105-0012 東京都港区芝大門 2-3-6 大門アーバニスト 401
TEL 03-5470-4401　FAX 03-5470-4410
E-mail：hoiku2022@nta.co.jp

編集後記

第 31 回研究大会 in 北九州は完全オンライン開催となりました。この特集号を見ればおわかりいただけるように、吉田会頭・現地実行委員会の皆様のご尽力によりすばらしい企画となっています。これからオンデマンド配信も始まります。参加登録は 11 月末までできますから、今からでも遅くはありません。興味を持たれた方はぜひ。コロナ禍中でも冷めることのない情熱に触れてください。

広報委員会 委員長　藤本　保

協議会ニュースに関するお問い合わせ先

一般社団法人 全国病児保育協議会 広報委員会
担当：藤　本　　保
〒870-0943 大分市大字片島83-7
大分こども病院
FAX.097-568-2970
E-mail:byouji@oita-kodomo.jp

Printed by AIKOHA